2024年

能登半島地震・豪雨
子どもたちへの緊急・復興支援

Save the Children

震災から1年の活動報告

公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

2024年1月1日に最大震度7を観測した
能登半島地震から1年

セーブ・ザ・チルドレンは、発災直後から石川県で被災した
子どもたちやその家族、子ども関連施設への支援を続けています。

おもな活動地
能登半島の市町の他、金沢市でも活動

1月1日 地震発生

1月

情報発信
「子どものための心理的応急処置(PFA)」などの情報を発信

子ども支援のニーズを調査
現地で子ども支援のニーズ調査を開始

緊急子ども用キットなどの提供
避難所などで緊急子ども用キット、ぬいぐるみ、衛生用品、衣料品などを提供

2月

給食補食支援
2月～4月実施
七尾市、穴水町、能登町、珠洲市の学校、幼保・こども園で給食の補食を支援

3月

屋外での「子どもの遊び場」
3月～8月実施
能登町、輪島市で、子どもたちが屋外でのびのびと遊ぶことができる「子どもの遊び場」を実施

専門的人材サポート
珠洲市で子どもの保育を支える専門的人材サポートを実施

4月

備品支援
学校、学童保育、幼保・こども園などに暖房器具やプリンター、給食施設用冷蔵庫などの備品を支援

5月

給食用簡易食器支援
5月～7月実施
輪島市の学校へ給食再開のための簡易食器1学期分を支援

「こどもひろば」1月～4月実施
子どもたちが安心・安全に過ごせる空間「こどもひろば」を避難所などで実施

「子どものためのPFA」研修
1、2、6、7月実施
石川県内の子育て支援関係者などに「子どものためのPFA」の研修や座談会を実施

皆さまのご協力により
能登の子どもたちに支援を届けることができました。

2024年1月1日に最大震度7を観測した能登半島地震によって、石川県をはじめ広範な地域が甚大な被害に見舞われました。遊んだり、学んだり、安心して過ごしたりする場が突然なくなるなど、子どもたちにとっても大きな影響がありました。

セーブ・ザ・チルドレンは、石川県において、緊急物資や学校・子ども施設再開に向けた備品の提供、子どもの居場所づくり、子どもの声を行政に伝えるためのアンケート調査、学びを支える給付金などを行いました。こうした緊急・復興支援活動は、皆さまのサポートがあってこそです。

心からの感謝の意とともに、ここに1年間の活動をご報告いたします。

私たちは2025年も能登半島地震および奥能登豪雨で被災した子どもたちの支援を行う予定です。引き続き関心をお寄せくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

髙井 明子（公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　専務理事・事務局長）

6月

学校備品支援

能登町の学校へ簡易エアコンを支援

防災のための備品支援

七尾市の学童保育へ保存用飲料水、防災ヘルメットを支援

7月

屋外での「子どもの遊び場」

子どもアンケート実施

被災地の子どもたちを対象にアンケートを実施

8月

子どもアンケートの結果を公表

石川県知事と各自治体に調査報告書の速報版を提出し意見交換

9月

9月21日 奥能登豪雨発生

豪雨の影響を受けた自治体や避難所を回り、衛生用品など物資を提供しながらニーズを調査。輪島市で浸水被害を受けた中学校に、複合機やモニターを支援

10月

学校備品支援

輪島市の学校へ防災ヘルメット、人工芝、給食用冷却器など備品を支援

（冷却器）

11月～12月

能登子どもサポート給付金

地震や豪雨により進級・進学や就職に向けた準備などに支障がないよう、発災時に七尾市、穴水町、能登町、珠洲市、輪島市に在住し被災した子どもたちに給付金を提供

このレポートでは、2024年1月1日の地震発生から12月25日までの活動を報告しています。各活動の詳細や、現在の活動については、P11の能登半島地震・豪雨子ども支援の情報サイトをご覧ください。

2024年1月～2024年12月25日時点の実績

数字で見る能登半島地震・豪雨緊急・復興支援活動

緊急子ども用キットなどの提供

のべ
839人

「こどもひろば」実施

19回
のべ
200人

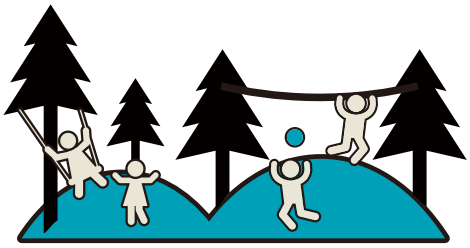
子どもの居場所支援

放課後子ども教室・一日保育支援

15回 のべ **284人**

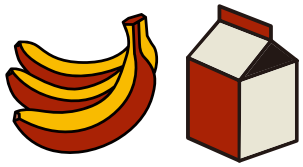
屋外での「子どもの遊び場」実施

のべ
15回 492人



給食補食支援

33ヶ所
2,615人
のべ30,934食

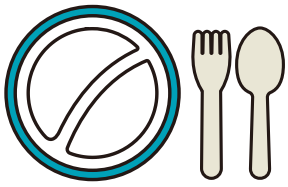


備品支援

32ヶ所
3,084人

給食簡易食器（使い捨て食器）支援

11ヶ所
826人
55回分



修学旅行

2校 32人

子どもアンケート

回答者
2,053人

「子どものためのPFA」研修

8回
のべ
719人

※「能登子どもサポート給付金」の実績は終了後に報告する予定です。

初動支援

1月4日から被災地域に入り、
子どもたちに必要な支援の調査を開始

2月初めまでに石川県七尾市、穴水町、能登町、珠洲市、輪島市、金沢市を回り、緊急子ども用キットや衛生用品、おもちゃなどの物資配布や「こどもひろば」の実施、「子どものための心理的応急処置（PFA）」の講座などを行いました。

1. 子どものニーズ調査

避難所や行政、子ども支援施設などを回り、子どもたちの状況や必要な支援を聴き取りました。断水が続く中で、衛生用品や、避難所で遊べるおもちゃ、衣類などのニーズが高いことが分かりました。

2. 緊急子ども用キットなどの配布

避難所に避難している子どもたちに緊急子ども用キットやぬいぐるみなどを配布しました。緊急子ども用キットは衛生用品、室内での遊び道具、防犯用ホイッスルなどを詰めたセーブ・ザ・チルドレンのオリジナルのキットです。

緊急子ども用キットの中身

3. こどもひろば

一般社団法人プレーワーカーズとともに、「こどもひろば」を避難所などで実施しました。避難生活で我慢することが多い中、子どもたちはさまざまな遊びをしながら思い思いの時間を過ごすことができました。

子どもの保護

子どもの安心・安全を守る

幼保・こども園、学童保育などの支援

能登半島地震のような大きな災害のあとに、災害前から地域で子どもたちを支えていた施設や機能が再開することは、子どもたちの日常性の回復につながります。幼保・こども園や放課後児童クラブ（学童保育）の運営再開のために、必要な備品提供や専門的人材のサポートを実施しました。

場所と内容

七尾市（幼保・こども園、学童保育）： 衛生用品、使い捨て食器、食料品、飲料品、防災ヘルメット、保存水など
能登町（小中学校、子ども関連施設など）：室内遊び用ゲーム
珠洲市（保育園）：アレルギー対応の菓子、食事用エプロン
輪島市（子ども関連施設）：室内遊び用ゲーム

この他、9月の奥能登豪雨の直後に、輪島市や珠洲市などで衛生用品や泥かきのための清掃用具などを提供しました。

放課後子ども教室などの再開をサポート

子どもの放課後や長期休暇を支える支援員も被災し、珠洲市では、一部の放課後子ども教室、長期休暇中の一日保育が難しい状況でした。セーブ・ザ・チルドレンは、以前からつながりのある団体と連携して、放課後子ども教室、春休み一日保育の運営のために、子どもを支える専門的人材サポートを実施しました。

場所と参加人数

【場所】珠洲市
放課後こども教室（3月18日～22日）：のべ20人
　連携団体：NPO法人くらしき放課後児童クラブ支援センター
春休み一日保育（3月23日～4月4日）：のべ264人
　連携団体：一般財団法人児童健全育成推進財団

屋外での「子どもの遊び場」実施

被災した地域では、子どもたちが外で遊べる場所や機会が少なくなっていました。子どもたちが思い切り外で遊べる機会を作るため、災害時の遊び場支援で連携している一般社団法人プレーワーカーズや地域の関係者とともに、輪島市と能登町で「子どもの遊び場」を実施しました。木にロープをつるして作ったブランコや端材工作、シャボン玉遊びは子どもたちに大人気。夏には水風船や水鉄砲、ビニールシートで水しぶきをあげながらのスライディング大会。子どもたちは久しぶりに思い切り体を動かして遊んでいました。

実施回数

輪島市：9回　　参加人数：のべ192人
能登町：6回　　参加人数：のべ300人

廣川　和紀 さん（一般社団法人プレーワーカーズ事務局長 / 理事）

初動から連携したことで、刻々と変わる“現場感”を共有しながら支援活動に臨めました。屋外遊びへの移行期にはセーブ・ザ・チルドレンが関係者との調整業務を担ってくれていたので、私たちは現場に集中することができ、子どもに寄り添って話を聴く場面も持てました。子どもと一緒に遊び、おしゃべりし、関係を紡いでいる時にこそ、ふと垣間見える子どもの状況や気持ちがあります。子どもが持つレジリエンスも信じながら支援を継続したいと考えています。

誰もができる、緊急下の子どものこころのケア

子どものための心理的応急処置（PFA）

セーブ・ザ・チルドレンは、子どものためのPFAの情報提供とともに、石川県内の子ども支援関係者などに対し、「子どものためのPFA」の理解を深める研修を実施しました。

パンフレットはこちら

地震や事故などの危機的な出来事に直面した子どもたちは、普段とは異なる反応や行動を示すことがあります。「子どものためのPFA」は、そのような子どもたちのこころを傷つけずに対応するための方法です。セーブ・ザ・チルドレンは1月から7月の間に、災害派遣精神医療チーム（DPAT）や日本赤十字社と連携し、自治体が主催する学童保育支援員や保護者を対象にした研修や講座を実施しました。

教育

子どもの学びの環境整備のために

給食補食支援

被災した地域では、学校再開後、徐々に簡易給食の提供などが始まりました。しかし、断水が続いていることに加えて、給食用の食材を準備することや調理場が被災し発災前と同じようなメニューを作ることが難しい地域もありました。栄養バランスのとれた食事を子どもたちに提供したいという声を受け、セーブ・ザ・チルドレンは各地域のニーズを確認しながら小中学校や幼保・こども園への補食支援を実施しました。

場所と内容

【場所】穴水町、能登町、珠洲市、七尾市
【内容】ヨーグルト、牛乳、野菜ジュース、チーズ、おさかなソーセージ、ドーナツ、フルーツゼリー、乳酸菌飲料、ミルクプリン、ゆで卵、バナナ、クロワッサン、麦茶、パウンドケーキ、ナッツなど

備品支援

学校では、地震により多くの設備が破損しました。セーブ・ザ・チルドレンは、学校再開と学びの環境整備のためのニーズを聴き取り、暖房器具やプリンター、エアコン、給食施設用の冷蔵庫や冷却器などを支援しました。仮設校舎での人工芝設置も支援し、子どもたちが安全に運動できるようになりました。

場所と内容

七尾市（小中学校）：ヒーター
能登町（小中学校）：冷凍庫、回転釜、食器戸棚など給食用設備、エアコン
輪島市（小中学校）：プリンター、給食簡易食器、防災ヘルメット冷却器など給食用設備、運動用人工芝

修学旅行支援

輪島市では、一部の中学校で、予定していた3年生の修学旅行費用が地震の影響でまかなえなくなりました。そこで、セーブ・ザ・チルドレンが費用の不足分を支援、9月に無事に修学旅行に行くことができました。子どもたちからは「今までの中学校生活の中で一番心に残った行事になりました」といった声が届きました。

給付金の提供

地震や豪雨の影響により進級・進学や就職に向けた準備、これまで続けてきた部活や課外活動などに支障がないよう、11月、セーブ・ザ・チルドレンが活動する5市町で一部損壊以上の被害を受けた世帯の小学6年生から高校生世代の子どもに対して、ひとり一律3万円の給付金を提供する事業を開始しました。（2025年1月完了予定）

提供：中学校

子どもアンケート実施

能登半島地震から半年が経過した7月、被災地域の子どもたちの地震や復興についての思いや意見を聴くために、小学4年生から高校生世代を対象にアンケート調査を実施。2,053人の子どもたちが回答を寄せてくれました。その集計結果と子どもたちの声をまとめた報告書の速報版を、8月29日と30日に石川県知事、石川県教育委員会、アンケート周知の協力を依頼した5市町などに提出し、復興計画や防災計画、学校での子どもたちの声の反映を提案しました。各自治体は、子どもたちの声を真剣に受け止めてくれました。能登半島地震後の子どもたちの意見や声をまとまった形で調査した初めての報告書は、多数のメディアで取り上げられ、全国に対しても広く声を届けることができました。

小川 正 さん（輪島市教育長）の声

1学期の間も、子どもたちは大変な我慢をしていました。その子たちが当時どんなことを思っていたのか、今とこれからのことをどんな風に思っているのか、私も先生方も知りたいと思います。何かしたいと思っている子どもたちの思いを大人がどう汲み取れるか、子どもたちの成長を育んでいけるかが、ふるさと輪島への愛着にもつながると思います。

アンケートのハイライト

（速報版より 上位の回答）

能登半島地震やその後の生活について大人や社会に伝えたいことがある **36.8%**

（伝えたいこと）

感謝の気持ち	41.0%
自分の住むまちの復興のこと	34.9%
地震が起きたときのこと	32.9%
被災した自分のまちのこと	30.8%
子どもが過ごす場所（遊び場、公園や居場所など）	29.9%

誰に伝えたい？総理大臣 **46.0%**

県知事	41.5%
国会議員	38.4%
市長・町長	34.9%
県の議員	27.0%

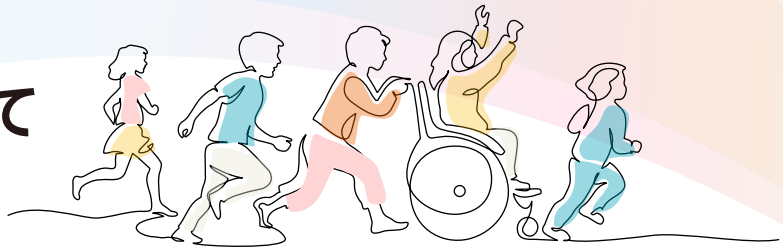
今後の復興に向けて自分の住むまちのためにしたいことがある **64.0%**

（したいこと）

自宅やまちの片づけ	27.0%
地域の行事への参加	24.7%
まわりの人をはげます	17.6%
募金	16.9%
震災を語りつぐ	13.7%
復興計画について知る	13.0%

子どもの声に耳を傾けて

能登子どもアンケートの結果から



子どもの意見が聴かれ尊重される権利は、子どもの権利条約の原則の一つです。日本でも、こども基本法において子どもの意見表明を規定しています。しかし、能登半島地震に関し、被災地域の子どもたちの声を広く聴く活動は行われていませんでした。

アンケートには、地震への不安、生活の変化に対する戸惑い、復興やまちへの思いなど、子どもたちのさまざまな声が寄せられました。「学校から見える景色が、がれきで悲しくなる」「仮設住たくなどで公園やグラウンド、外で遊べるところが減っていっています」という声からは震災が子どもたちの日常生活に及ぼした影響が伺えます。「今でも余震が来ると、あの日の事を思い出して泣いてしまいます」「被災した人への支援をもっと厚くしてほしい」と、こころのケアの必要性を示唆する声、支援を求める声も多くありました。また、「目をそむけないで」「見捨てないで」と訴える記述や、地域格差、復興の遅れに対する怒りや憤りを隠さない声も目立ちました。

「今、ぼくにできることはありませんか？」「もっと子どもの意けんを聞いてほしい」など、子どもたち自身が復興に関わりたいという声もありました。震災を経験した子どもたちは、単に支援を受けるだけではなく、復興の主体者でもあります。こうした思いをしっかりと受け止め、地域の復興の中で生かしていく必要があります。

子どもたちが声を届けたい相手として最も多かったのは政策決定者でした。災害などの緊急下においても子どもの意見表明権の確保は不可欠です。

アンケートでは「自分たちの想いが全国に届いてほしい」という願いも寄せられました。子どもたちへの中長期的な支援のために、セーブ・ザ・チルドレンも、子どもたちの声を聴きながら、支援活動を継続していきます。

アンケートに寄せられた子どもたちの声

この地震が起きて、あの日までは当たり前にあったものが失われました。祖父母の家や、学校の給食も長い間ありませんでした。伝えたいことは地震が起きても人がきずつかない世の中にしたいということです。　（七尾市、小6、男）

私は、この大きな地震があったことを語りついでいきたいと考えています。なぜなら、この大きな地震によって亡くなった方がたくさんいるのに、無かった物としてかたづけられたくないからです。また忘られたくないからです。
（穴水町、中1、女）

学校生活が大きくかわり中学校でやることになってすこしこころぼそいです。　（能登町、小6、女）

あそび場所がかせつじゅうたくでうめつくされたからあたらしい広いあそびばをつくってほしい。　（珠洲市、小4、女）

中学生がすごせる場所、自転車でも安全に交通できる道、がほしい。（遊びや勉強スペース、学校行事ができる所）
（輪島市、中1、女）

地震は普段の生活を一瞬にしてうばえる怖さを知った。普段の生活にもっと感謝していきたい。　（七尾市、高2、男）

やっぱり命は大切だなと思いました。あと大人にはなかなか言えなかったりするので話し合うときは子供同士だけで話せるといいと思いました。　（穴水町、小6、女）

道路の復興を進めてほしい。被災した人への支援をもっと厚くしてほしい。　（能登町、高2、女）

今、ぼくにできることはありませんか？　（珠洲市、小5、男）

輪島市は見捨てられたんですか。帰る場所がないのは嫌です。自分がおとなになっても、帰ってこれるように支援してほしいです。　（輪島市、高3、女）

「2024年能登半島地震子どもアンケート
～震災から半年 いま伝えたい子どもたちの声～」
アンケート結果報告書 速報版はこちらから

子どもや保護者からの声

支援を行う中で、各地の子どもや保護者、自治体・学校関係者、子ども支援者などからたくさんの声をいただきました。

避難所での「こどもひろば」

子どもたちの声

「今まで避難所でみんなで遊ぶことがなかったので楽しかった」「今日久しぶりにこんなに笑った」「今日はとても楽しい日！」

保護者の声

「最近寝つきが悪くなっていたので今日はすっきり眠れると思う」

「こうした場があるとありがたい」

給食の補食支援

子どもたちの声

「牛丼好き～」「牛丼おいしい」と言いながら楽しそうに食べ、完食した子どもたちが、きれいなお皿を見せてくれました。

保護者の声

「今日こんなの（給食で）でた！と帰ってきた子どもが嬉しそうに話していた」

緊急子ども用キットやぬいぐるみなど物品支援

子どもたちの声

（犬のぬいぐるみを抱いて）

「あったかくて気持ちいい、かわいい」

保護者の声

「避難所ではずっとゲームをしているので、（折り紙やルービックキューブなど）遊び道具は助かる」

能登町、輪島市での屋外の「子どもの遊び場」

子どもたちの声

「（今日一番楽しかったのは）段ボールの芝滑り！」

「前回めっちゃ楽しかったから今日も濡れに来た！」

保護者の声

「子どもは前日から楽しみにしていた。当日の朝も早く行く、絶対に4時まで遊ぶ！と張り切っていた」

「（娘が）初めてブランコに一人で乗れた。すごく嬉しそうだった」

「本当にこういう場があって助かる」

能登子どもアンケート

報告書を受け取った自治体関係者の声

「子どもとざっくばらんに話ができる機会があればいいなと思う。（中略）能登の子どもたちはなかなか、言いたいことを積極的に言える子どもが少ないと思う。何かを思っていても遠慮しがち。だからこそ後押しする大人の存在が大事」

子どものための心理的応急処置（PFA）研修

学童保育支援員の声

「年齢によって示す反応、行動をみて、聴いて繋ぐ大切さを再確認しました」

「地震ごっこ等の子どもへの対応の仕方に悩んでいた。今日のお話を聞いて、自分の対応が大丈夫だったと安心した」

学校への支援

学校関係者の声

「とにかく素早い支援で助かった、ヒーターがあったので避難者の方が体育館に移れ、教育活動が早く再開できた」

（七尾市）

「初めて給食を出したときは歓声が上がっていました。温かい給食をみんなで食べられるだけで学校生活の楽しさが全然違います」

「6月ですでに暑いので、夏前にエアコンを取り付けることができてよかった」

（能登町）

メッセージをいただきました

眞智 富子さん（能登町教育長）

地震発生後、いち早く来てくださった支援団体が、セーブ・ザ・チルドレンでした。
初めてお会いする方に、遠慮もなく、学校に室内で遊べるゲームを届けてくださいとお願いしたことを思い出します。
その後も、昼食用の補食、4月の給食再開に間に合うように壊れた施設設備の準備、熱中症予防のための空調設備など、子どもたちの健康な体を保つためのご支援が本当にありがたかったです。また、子どもたちの声から遊び場づくりをされ、心身の健康を大切にしてくださったことが、とてもうれしかったです。子どもたちからのアンケート結果は、私の仕事の支えです。
能登町の子どもたちも皆様のように、困っている人を支援できるような子たちであるようにと願っています。いつも支えていただき、本当にありがとうございます。

鈴木 瞬さん（金沢大学人間社会研究域学校教育系・准教授）

2024年1月1日の発災当初、能登半島の初動調査に同行する中で感じたのは、継続した支援を行うための地理的課題の大きさです。道路が崩れ、奥能登へは片道4～6時間かかるとともに宿泊施設もないため、継続して子ども支援を行うことは容易ではありませんでした。また能登は地縁が強いものの、決して受援力が高いとは言えない地域も多く、これまで以上に、外部支援者には地元の支援者のスピードに寄り添うことが求められていたように思います。このような状況下で、セーブ・ザ・チルドレンの支援は常に現地の支援者に寄り添いながら行われていたように思います。珠洲市の放課後子ども教室の再開支援や、春休みの保育の人員支援、子どもの声を届けるアンケートなどはそのような支援の一例です。本当にありがとうございました。

奥能登豪雨支援活動

輪島の学校備品支援

2024年9月21日から23日にかけて発生した奥能登豪雨により、特に能登町、珠洲市、輪島市は大きな被害に見舞われました。セーブ・ザ・チルドレンは同月24日に被災地域に入り、各自治体や学校関係者、避難所担当者などに被災状況やニーズを確認しました。能登半島地震で支援を行っていた学校が浸水したため、泥かきや清掃のための備品、また授業再開のために必要な複合機の支援を行いました。また避難所で衛生用品などを提供しました。

場所と内容

【場所】能登町、珠洲市、輪島市
【内容】緊急子ども用キット、ぬいぐるみ、衛生用品、学校で使用する複合機、モニター

2024年能登半島地震・豪雨緊急・復興支援会計報告
（2024年1月～10月末）

事業名	金額	
初動支援	16,929,332	緊急物資配布、避難所での「こどもひろば」実施含む
給食補食支援	1,325,532	
子どもの居場所支援	8,376,539	屋外での「子どもの遊び場」、放課後子ども教室サポートなど
学校備品支援	16,781,875	
幼保・こども園、学童保育備品支援	1,785,578	
子どもの意見表明支援	689,810	能登子どもアンケートの実施および関連活動
子どものためのPFA研修など	257,584	
給付金	157,626	事務関連費。申請期間11月1日～12月16日、2025年1月終了予定
人件費	14,401,744	
管理費	6,637,638	
		支出 計 67,343,258 円

この1年間、多くの皆さまから温かいご支援をいただき、
誠にありがとうございます。
セーブ・ザ・チルドレンは、2025年も、常に子どもたちや
保護者・地域の声に耳を傾けながら、支援を継続します。

能登半島地震・豪雨
子ども支援の
情報ページ

最新の情報については、メルマガ・ウェブサイト・SNSなどで発信していきます。

セーブ・ザ・チルドレンは、
子どもの権利のパイオニアとして
100年以上の歴史を持つ、
子ども支援専門の国際組織です。

セーブ・ザ・チルドレンは、日本を含む世界120ヶ国で子ども支援活動を行う、民間・非営利の国際組織です。子どもの権利が実現された世界を目指し、1919年から活動しています。

創設者 エグランタイン・ジェブ

Save the Children

公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F
TEL: 03-6859-0070（平日9:30～18:00）
www.savechildren.or.jp

2024年12月